

四旬節第5主日

福音朗読：ヨハネ 8・1-11

2025.4.6 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日はこの説教の機会に、皆さんにお願いしたいことが一つあります。それはミャンマーについてのことです。

ご存知のように、1週間前にミャンマーは大きな地震に見舞われて、今のミャンマーの政府の発表によっても3,000人ぐらい死者が出ているということです。そして、その自然災害だけではなく——わたしたちも毎週の共同祈願の中でお祈りしておりますが——、軍事クーデター以来、数年にわたって国内が戦争状態というか、非常に分裂している、そういう困難を抱え、そして今回の地震にも見舞われているということなんです。

東京教区とミャンマーのカトリック教会は長年にとって友情を育んで協力関係にあります。また日本にもミャンマーの人たちはたくさんいらっしゃいます。色々なところで、飲食店やコンビニとかで——ベトナムの人もたくさん働いてますけども——ミャンマーの方も多いわけです。ただ、カトリック信者の割合は日本と同じぐらい少ないので、信者の数は日本でもそれほど多いというわけではありませんが、東京教区の中にもミャンマーの共同体が存在していて、月に1回、築地教会で集まっているわけです。

そんな中で今回、本当に色々な心配の種があって、そして大きな災害で心を痛めているミャンマーの兄弟姉妹と共にミャンマーのために祈るという集まりが来週の日曜日にあります。来週、受難の主日の日曜日の夕方6時から築地教会で行われます。それについては、聖堂入口の教区からの色々なお手紙が掲示されているところに貼ってありますのでご覧になっていただきたいのですが、今日じゃなくて1週間前にこのことをお話ししているわけですが、それは1週間後の日曜日、ご都合をつく方は——あるいは、だけではなくて、ご都合つけて、多くの方が築地教会の夕方6時のミャンマーのために祈るっていう集まりにご参加いただきたいなということが、わたしがお願いしたいことなんです。

その集まりは、ミャンマーの人たちが集まるんじゃないんです。ミャンマーのために東京教区のわたしたちが、同じ教会の仲間として共に祈るっていう、そういう機会なわけです。聖パウロはコリントの信徒への手紙の中で、一つの部分が苦しめば体全体が共に苦しみ、一つの部分が栄光を受ければ体全体が共に喜ぶ、そんなキリストの体の中にわたしたちは組み入れられたんだということをコリントの第一の手紙の12章で言っているわけですが（一コリント 12・26）、

まさにこういう時こそわたしたちは、本当に心配の中にある、そして心を痛めている信仰における兄弟姉妹と共に——お祈りはもちろん場所が離れていても心を合わせて祈りすることができますが、しかしその場に共にいるということを通して、それは、みんな一緒にいるんだ、あなたたちと共にあるんだということを示すしるしになるわけです。ですから、多くの方が参加していただきたいわけです。

築地教会は今レオ神父様——この高円寺教会にも若い頃に主任代行としていらっしゃったと伺っていますが——レオ神父様が主任であって、レオ神父様が東京教区のミャンマー委員の代表でもあってそのパイプ役を務めていらっしゃる、そういう関係で築地教会の中にミャンマーの共同体が集っているわけですが、わたしたちがまさに共にあることを通して——でも築地教会はそんなに大きな教会というわけではないから満員になっちゃうかもしれませんが、でも満員になった、前庭に溢れるほど人が集まるということが大切なような気がします。お祈りの集いていうのは、何か映画を見に行くとか音楽会とかではないので、自分の席があるかないかっていうことを心配する場ではないんです。とにかくそこに一緒にいるっていうことで、それがわたしたちがまさにキリストの体になっていく一つの具体的な行いなのではないかと思うんです。

今日の福音では、まさにイエス様がみんなから非難されている、まさに罪を犯したその人と共に——その人を裁き、罰を与えるのではなく——その人と共にあるという姿をわたしたちに示してくださいました。それは、信仰生活や宗教あるいは神様に祈るということは、ルールとかの前に、本当にこう絶望している人がもう一度立ち上がることができるように励ましそして共にいる、そのことなんだということを示してくださったエピソードとして、福音書の中にあるんじゃないかと思うんです。

外国の方々が東京教区の、あるいは日本の教会の一員なんだというときに、ともすると、「皆さんも日本の教会の一員ですから小教区に登録してください」とか、あるいは「維持費を収めてください」とか、「日本語のミサに参加してください」とか、そういう「何をしてください」という要求のことがまず第一に議論されがちなんですけども、でも本来、「あなたたちも日本の教会の一員だ」と言うならば、まず第一には困難の時にあるいは本当にその心配や色々な時に共にあるということを示すのが本来は先なのではないのかなと思うわけなんです。

わたしたちがこの機会だけではなく、まさに今日の福音の中で神様のみこころは、あるいは信仰の恵みは、絶望や困難の中にある人を励まし共にいるためなのだ——もちろん「罪はいつでもいいんだよ」ってイエス様が言っているわけではないわけです——しかしそれを裁いたり指摘したりその前に、励まし共にあることを通して、一人ひとりが神様の恵みの中に歩むことができますように、わたしたちの中にもイエス様のみこころをいただき、そして今回このミャン

マーのために祈るというその機会を通して、わたしたち自身もキリストの体の一部なのだということを表せたら良いのではないかなと思います。

それぞれ一人ひとりが、困難の中にあるときに共にいてくださるイエス様に出会い、またわたしたち自身もそのイエス様の心を自分の心として、互いに励まし合うことができますように、このミサを通して、一致の恵み、そしてイエスと共にあるその恵みを互いのために願ひ合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>